

【論文提出者】 社会文化科学教育部 人間・社会科学専攻 公共政策学領域
氏名 田端 幸朋

【論文題目】 クリスタラー三原理相關論に基づく地域空間構造の歴史的変容について―長野県旧五加村地域を事例として―

【授与する学位の種類】 博士（学術）

【論文審査の結果の要旨】

田端幸朋氏が提出した博士論文「クリスタラー三原理相關論に基づく地域空間構造の歴史的変容について―長野県旧五加村地域を事例として―」は、日常生活圏レベルの地域空間構造の長期的変遷を説明するため、経済領域と非経済領域との相互作用に着目した独自の分析枠組みである「クリスタラー三原理相關論」を援用して解釈を試みたものである。

①本論文の位置付け

ドイツの経済地理学者 W. クリスタラーの提起した中心地理論は、都市的集落の空間的配置の規則性を説明する理論として広く知られている。同理論は「市場原理」「交通原理」「行政原理」の作用によって中心地の配置が規定されるとするものであるが、この三原理間の相互関係については従来ほとんど顧みられることはなかった。本論文は、クリスタラーが指摘した三原理の間の相互作用に注目することによって、資本主義経済の空間構造を説明する著者独自の論理を提示したことが第1の特徴である。加えて、実証においては、既往研究や資料の豊富な長野県旧五加村（現千曲市）を主たる対象地域として、明治以降の長期的変遷過程を跡づけた歴史地理学的な研究とも位置づけられる。

②本論文の示す新知見、独創性

第1に、著者のいう三原理相關論は、財の生産と消費を規定する市場原理、財の流通や通勤・生活圏を規定する交通原理、行政施策によって市場原理と交通原理を補完する行政原理、そして社会構造と生活圏がこれら三原理と相關することにより、地域空間構造が形作られるというものである。経済領域と非経済領域の関係を明示的に取り込んだ空間理論の一つとして、従来にはみられなかった説明枠組みを提示した点において、独自性を有している。第2に、三原理相關論の視角から地域空間構造の長期的変遷を解釈した点に新規性が認められる。すなわち、明治以降の在来産業発展期には市場原理など三原理が個別に発展して地域空間構造が不安定化し、資本主義経済確立期においても不安定性が維持されたこと、高度成長期以降の産業立地と都市機能の整備、地域共同意識の維持などの結果として、三原理間の相互作用が深化し地域空間構造の自律性が高まったと捉えている。

③本論文の評価等

本論文が提示した三原理相關論の独自性と、地域空間構造の長期的変遷を把握する試みについては、一定の評価を与えることができる。一方で、根拠の提示や解釈の客観性についていささか疑問が残る箇所も残されているが、論文全体の価値を大きく損なうものではない。なお本論文の内容は経済地理学会の『経済地理学年報』第62巻1号（2016年）、日本都市地理学会の『都市地理学』第15号（2020年）、日本地域経済学会の『地域経済学研究』第44号（2023年）に査読付き論文として掲載されており、客観的な評価を受けている。

以上より、本審査委員会は本論文を博士学位にふさわしい水準であると判断し、合格と判定する。

【最終試験の結果の要旨】

田端幸朋氏が提出した論文「クリスタラー三原理相關論に基づく地域空間構造の歴史的変容について―長野県旧五加村地域を事例として―」について、2024年1月15日（月）16時30分から18時ま

で、社会文化科学教育部長室において審査委員全員の出席の下、口述試験を行った。また、2024年1月29日(月)16時30分から17時30分まで、Zoom オンライン会議システムにて学位論文公開発表会を実施した。口述試験と公開発表会では、専門的な学識に基づいた応答が適切になされた。以上の結果、上記の者は、提出された論文に対する専門領域について優れた学識を有し、自立して研究を行う能力が十分にあると判断され、審査委員会は、博士(学術)の学位を上記の者に授与するに値すると判定するに至った。

【審査委員会】

主査 鹿嶋 洋

委員 外川健一

委員 大野正久

委員 島村玲雄